『伊勢物語』五十二段と漢詩文
―屈原・潘岳との関わりを通して―

内藤英子

キーワード：飾り粽　屈原　雉　潘岳　みやび

一　はじめに

『伊勢物語』と漢詩文の関わりは、初段の『遊仙窟』や六九段の『鶯鶯伝』をはじめとして、すでに多くの先行研究で指摘されている。[1] その関わり方には、漢詩文の訓読的な引用だけではなく、「虚構的設定の発想の源」[2]としたり、「先行作品（典拠）の主題的な読みを前提とした〈引用〉」[3]などもみられる。本稿では、五十二段と漢詩文との関わりを考えることによって、新たな読みを提示したい。五十二段は、次のような短い章段である。

昔、男ありけり。人のもとより飾り粽をおこせたりける返り事に、

あやめ刈り君は沼にぞまどひける我は野に出でて狩るぞわびしき

とて、雉をなむやりける。

この歌は、『大和物語』と『在中将集』などにもみられるが、詞書などに若干の異同はみられるものの和歌そのものに字句の異同はない。『大和物語』百六十四段では、「男」が「在中将」と特定され、『在中将集』の詞書からは、「飾り粽」を贈られたのが「五月五日」であることがわかる。

この歌の主眼は、「かる」という言葉に、植物を「刈る」と動物を「狩る」という掛詞的な二つの意味を見出し、緊密な対句構成になっている点にある。相手が「沼に」「まどひ」ながら五月五日の時宜にかなったあやめを刈り飾り粽にして贈ってくれたのに対して、自分は鷹狩の季節ではない五月に雉を贈るために「野に出」て狩をしているのが「わびし」いと解釈し、男女の恋愛を前提として「飾り粽」を贈った「人」を女性と考えるのが一般的である。[4] だが、現在の注釈では、「飾り粽」を贈られ「雉」を贈った理由や、相手が沼に「まどひ」、自

分が野で「わびし」かった理由が解明されているとは言い難い。そこで、五十二段で贈答される「飾り粽」と「雉」に着目し、それぞれの背景にある中国の文人屈原と潘岳との関わりを考察することによって、「人」を男性の「友」として新たな読みを提示する。さらに、五十二段前後の章段が漢詩文によるゆるやかな連想によって展開することを明らかにした上で、初段に続く狩章段の五十二段が『伊勢物語』のめざす「みやび」の表現された段であることを論じたい。

二　「飾り粽」と屈原

本章では、冒頭から歌の上の句「あやめ刈り君は沼にぞまどひける」までを考察する。

まず、「飾り粽」を「人」が贈った意味を考えたい。「飾り粽」が平安時代に歌や詞書に用いられた例は、五十二段歌以外に、『拾遺集』に道綱母の歌が一例あるだけである。[5]

五月五日、小さき飾り粽を山菅の籠に入れて、為雅の朝臣の女に心ざすとて

心ざし深き汀に刈る菰は千年の五月いつか忘れん

「飾り粽」は五色の糸を巻き造花などを付けて飾った粽で、その「飾り粽」を道綱母は五月五日の端午の節句に姪の健やかな成長を願って贈っている。[6]粽を巻く材料としては、一般的には菰や茅、笹などが用いられた。「菰」と同様に五月五日に「刈る」ものとしてあやめ草があり、『源順集』に道綱母の歌の類歌がある。

五日、菖蒲につけて、あるところにたてまつらせける

心ざし深き汀のあやめ草千年の五月いつか刈るべき

五月五日に「刈る」べき深い汀に生えている「あやめ草」そのものが贈り物とされている。五十二段歌の「あやめ」は「あやめ草」の略で菖蒲（しょうぶ）を意味し、菖蒲はその香気によって邪気を払うとされ、平安時代には、主に薬玉や屋根を葺く材料として用いられたが、粽を巻く材料とされることもあったのだろう。

五月五日に粽を作って供える背景には、この日に汨羅に入水した屈原を世の人々が哀れんで祭った中国の故事がある。『芸文類聚』巻四「五月五日」の項にみえる『続斉諧記』には、次のような屈原にまつわる伝説が記されている。

屈原五月五日投汨羅而死。楚人哀之、毎至此日、竹筒貯米、投水祭之。……世人作粽、并帯五色糸及楝葉、皆汨羅之遺風也。（屈原五月五日汨羅に投じて死す。楚人之を哀れみ、此の日に至る毎に、竹の筒

に米を貯へ、水に投じて之を祭る。……世の人粽を作り、并せて五色の糸及び楝葉を帯ぶるは、皆汨羅の遺風なり。）

この「粽」は「五色糸」で作られた色鮮やかなもので、日本の五色の糸で作られた「飾り粽」につながる。道綱母は姪の健やかな成長を願って「飾り粽」を贈ったが、「人」が男に「飾り粽」を贈った意図は、屈原との関わりがあるのではないだろうか。

屈原は戦国時代の楚の王族に生まれ、王の側近として活躍したが、妬まれ讒言にあって失脚し、憂国の情を抱きながら湘江のほとりをさまよい汨羅に投身した。『楚辞』に屈原は次のように描かれている。

①屈原既放、遊於江潭、行吟沢畔、顔色憔悴、形容枯槁。（屈原既に放たれて、江潭に遊び、行くゆく沢畔に吟ず。顔色憔悴し、形容枯槁す。）「漁父」

②中瞀乱兮迷惑。私自憐兮何極。（中は瞀乱して迷惑す。私かに自ら憐れみて何ぞ極まらん。）「九弁」

③献歳発春兮、汨吾南征。……倚沼畦瀛兮、遥望博。（献歳発春、汨として吾南に征く。……沼に倚り瀛を畦ち、遥望博し。）「招魂」

①で屈原は追放されて湘江の深いよどみに行き、沢のほとりを歩きながら楚辞を口ずさんでいる。②で屈原の心中は暗くかき乱れ迷い惑って、自らを憐れんでいる。③では、江南の地をさまよう屈原が沼に沿い池の土手を行きながら、遥かな沼沢の景色を眺めている。このように、『楚辞』に表現された屈原には惑いながら沼沢をさまよう姿が結びついているが、五十二段歌の上の句「沼にぞまどひぬる」と内容的には共通した表現になっている。

次に、「沼に」「まどふ」が意味することを考えたい。管見では「沼に」「まどふ」と詠まれた歌を当該歌以外に見出すことができず、「沼」と「まどふ」、それぞれの意味することについてまずは検討したい。

④埴安乃池之堤之隠沼乃去方乎不知舎人者迷惑（『万葉集』巻二「高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首并せて短歌」）

⑤夏草の上は茂れる沼水のゆくかたのなきわが心かな（『古今集』巻十物名「交野」忠岑）

④の初句から三句「隠沼乃」までは「行くへを知らず」を起こす序であり、沼に「迷惑」のではないが、高市皇子の薨去により仕えていた舎人たちがこの先どのように生きていったらよいかわからず戸惑っている様子が詠まれている。⑤は「夏草の上は茂れる沼」で、その「沼」の「水のゆくかたのなき」ととり、沼の水が流れ出て行く方法がないように、自分の心も晴れ行く方法がないと

いう意味である。この歌には雉を狩る名所である「交野」が物名として詠みこまれてもいる。「まどふ」については、『伊勢物語』に八例みられる。

⑥思ほえず、ふるさとに、いとはしたなくてありければ、心地まどひにけり。（初段）

⑦昔、男ありけり。その男、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めにとて、行きけり。もとより友とする人、一人二人して行きけり。道知れる人もなくて、まどひ行きけり。（九段）

⑧かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ（六十九段）

地の文での用例は六例で、⑥のように「心が動揺する」という意味が三例、⑦のように「さまよう」の意味が三例となっている。歌は⑧と五十二段歌の二例で、⑧は暗闇で先が見えず迷うように「心が乱れて判断に迷う」という意味である。五十二段歌にある「沼にぞまどひける」には、まず、生い茂った夏草や泥で沼の視界が悪いため、あやめを求めて沼でさまようという実景的な意味が考えられるが、心が晴れずこの先どのように生きていけばわからなくて迷うといった心情的な意味も重ねられている。「まどふ」は漢詩表現に基づく見立ての語法の一つで、[7]「沼」で「まどふ」様子に心の迷いを見立てている。

それでは、その心の迷いの原因とはどのようなものだろうか。江戸時代の注釈書『勢語通』[8]の解釈を次に示したい。

此ちまきを送れる人も、時にあはず、意を失へる人ならん。粽を送るより、中将、屈原が不遇の事を思ひ出て、返しせらるゝ也。漁父辞に、行吟沢畔と有言を用ひて、ぬまにぞまどひぬるといへり。我も朝庭にはあらで、野外に出て、雉をかりありくは、同じさまにて、わびしきと也。

男も「人」も時勢に合わず失意を抱いており、男は「人」から粽を贈られて屈原の不遇を思い出し、『楚辞』「漁父」の一節を用いて「人」を沼にまどうと表現し、男自身も朝廷ではなく野外で雉を狩りわびしい気持ちを抱いていると解釈し、「人」と屈原との関わりを指摘している。

九段の先ほどの⑦に続く部分で、男と屈原の関わりはすでに先行研究で指摘されている。

⑨行き行きて、駿河の国に至りぬ。……修行者逢ひたり。「かかる道は、いかでかいまする」と言ふを見れば、見し人なりけり。

⑩屈原既放、遊於江潭、行吟沢畔……漁父見而問之曰

「子非三閭大夫与。何故至於斯。」（屈原既に放たれて、江潭に遊び、行くゆく沢畔に吟ず。……漁父見て之に問ひて曰く、「子は三閭大夫に非ずや。何の故に斯に至るや。」と。）（『楚辞』「漁父」）

⑨の「行き行きて」は苦難の流離・漂泊・彷徨の表現で、「かかる道は、いかでかいまする」と修行者が男に尋ねるのは、⑩で漁父が屈原に「子は三閭大夫に非ずや。何の故に斯に至るや。」と尋ねたのに倣っているとの指摘がある。[9] さらに続く隅田川における男と渡し守の問答も、『楚辞』「漁夫」の屈原と漁夫の人生論上の対立を心情の物語に置き換えていると指摘されている。[10] 屈原は自分を有用と信じ強い不遇感を抱いているが、男は自分を京では無用と思い込み不遇感を抱いている点は異なる。

このように、九段では男が屈原像に重ねられているが、五十二段で男は、五月五日に「人」より贈られた「飾り粽」から屈原を連想し、「人」を屈原に見立て、先述した『楚辞』に描かれた水辺に彷徨する屈原像を用いて、「君は沼にぞまどひける」と和歌に表現している。九段の男と同じように「人」を屈原に重ねてとらえていることから、この「飾り粽」を贈ってきた「人」は男性と考えられ、九段の「もとより友とする人」のような友との交流を背景にしてこの五十二段を読むことができる。この「人」の心の迷いも、九段の男と同じように、自分を京では無用とする不遇感に起因していると考えられる。

三　「雉」と潘岳

本章では、歌の下の句「我は野に出でて狩るぞわびしき」から最後までを考察する。五十二段歌は上の句と下の句で緊密な対句構成となっており、上の句で屈原が連想されるのであれば、下の句にも漢詩文に由来する人物が連想されるのではないだろうか。

まず、「飾り粽」を贈られて、なぜ「雉」を贈るのかについて考えたい。「雉」は日本の文献では、奈良時代の『古事記』には、万葉仮名で「佐怒都登理　岐芸斯波登与牟」（さ野つ鳥　雉（きぎし）はとよむ）と表記され、「きぎし、きぎす」と呼ばれていたが、平安時代半ばになると「きじ」の読みが主流となる。「さ野つ鳥」は「雉」の枕詞で「野にいる鳥」の意味である。『万葉集』には、雉を詠んだ歌が八例あるが、その内四首が大伴家持の歌である。

春の野にあさる雉（きぎし）の妻恋に己があたりを人に知れつつ（巻八・春の雑歌「大伴宿禰家持が春の雉の歌」）

雉は繁殖期の春になると雄が雌を大きな鳴き声で呼ぶ。また、夜明けに鳴き、家で飼われる「鶏」と比較される。

春の季語で、奈良時代に「雉」は、「雉」または「春雉」と漢字で表記されていた。平安時代の半ばからは、雉は贈り物としての用例が多くなる。『伊勢物語』には、九十八段にも「雉」が登場する。

昔、おほきおほいまうちぎみと聞こゆる、おはしけり。仕うまつる男、長月ばかりに、梅の造り枝に雉をつけて奉るとて、

わが頼む君がためにと折る花はときしもわかぬものにぞありける

と詠みて奉りたりければ、いとかしこくをかしがりたまひて、使に禄たまへりけり。

九月に男は、梅の造花の枝に雉をつけて太政大臣に献上し、和歌には「きじ」を詠みこんだ。造花であれば、時節に関わりなく年中花が咲くと主人の徳を称えている。五十二段では、友人に狩の季節ではない五月に苦労して手に入れた雉を贈っているが、九十八段では、権力者におもねるために九月の時宜にかなった雉を贈っており、対照的な内容になっている。『大和物語』には、男が女に雉を贈る話が二段あるが、その一つ百六十七段の和歌は、「いなやきじ人にならせるかりごろもわが身にふれば憂きかもぞつく」とあり、「着じ」に「雉」、「狩衣」の「狩」に「雁」、「香も」に「鴨」が掛けられ、物名歌の性格を持つ。このように、『伊勢物語』と『大和物語』では、「雉」が歌に詠みこまれる場合、物の名を詠みこむ技巧に主眼がおかれている。ただし、五十二段での雉は、地の文にあり同じように考えることは難しい。

次に、漢詩文での用例をみたい。

雉之朝雊　尚求其雌。（雉の朝に雊（な）く　尚ほ其の雌を求む）（『詩経』節南山之什「小弁」）

『詩経』にすでに「雉」という漢字表記で九例あり、雉は雌を求めて朝に鳴くことがわかる。『萬葉代匠記』は先述した家持歌の注にこの『詩経』の句を指摘しており、家持歌は漢詩文的発想で詠まれ、雉と漢詩文の関連性を示唆している。三国時代の晋の潘岳は、「秋興賦」（『文選』）と河陽に桃花を植えた故事で、当時の日本の知識人に著名な人物であったが、『文選』には、雉狩りの楽しみを詠んだ潘岳の「射雉賦（せきちのふ）」がある。

涉青林以遊覧兮、楽羽族之群飛。ⓐ偉彩毛之英麗兮、有五色之名翬。厲耿介之専心兮、參雄鷙之姣姿。巡丘陵以経略兮、画墳衍而分畿。ⓑ於時青陽告謝、朱明肇授。……若乃耽槃流遁、放心不移、忘其身恤、司其雄雌。ⓒ楽而無節、端操或虧、此則老氏所誡、君子不為。（青林に涉（わた）りて以て遊覧し、羽族の群れ飛ぶを楽しむ。偉なる彩毛の英麗、五色の名翬有り。

耿介の専心を厲まし、雄豔の姱姿を奏る。丘陵を巡りて以て経略し、墳衍を画して畿を分かつ。時に於て青陽謝を告げ、朱明肇めて授けらる。……乃ち槃しみに耽り流遁し、心を放ちて移らざるがごときは、其の身の恤ひを忘れ、其の雄雌を司す。楽しみて節無く、端操或いは虧く。此れ則ち老氏の誡むる所にして、君子は為さざるなり。）

ⓐで毛色の美しい鳥として名高い五色の雉を示し、雉は孤高の心を持ち、雄壮でなわばりを定めるが、それはⓑにある季節が春から夏になろうとしている時期で、略している部分には、潘岳がおとりの雉を使って様々な工夫をし雉狩りを楽しむ様子が描かれている。賦の末尾ⓒでは、雉狩りの楽しみに心を奪われると、自分の憂うるべきことも忘れて正しい生き方に欠け、これは老子の戒めたことで君子は行わないと結んでいる。初唐に編纂された『芸文類聚』には、産業部の「田猟」にこの潘岳の「射雉賦」があり、鳥部の「雉」には、潘岳と同時代の晋の詩人の賦が四作品あるが、その一つ伝玄の「雉賦」を示す。

稟炎離之正気、応朱火之禎祥、播五彩之繁縟、被華文而成章。（稟として炎離の正気、応に朱火の禎祥とすべし。五彩の繁縟を播し、華文を被り章を成す。）

雉は夏の季節を意味する「朱火」と詠まれ、「五彩」つまり五色の毛色であることがわかる。漢詩文を背景にして五十二段を読み直してみると、人から贈られた「飾り粽」は先述したように五色の色鮮やかなもので、その返礼品として五色の美しい雉を贈るのはふさわしい。日本の文章でも『伊勢物語』より後の成立だが『大鏡』に「雉は紺青のやうにて」と毛色の美しさが描写されている。また、雉と季節の関係について、日本での雉は繁殖期の春や鷹狩の季節である秋、冬との結びつきが強いが、潘岳の「射雉賦」では春から夏となる季節、伝玄の「雉賦」では夏とともに詠まれ、漢詩文の世界では雉と夏の結びつきがある。五十二段は夏となっているが、漢詩文の影響とともに、繁殖期の春とは季節をずらして恋の文脈でないことを暗示しているのかもしれない。

さらに、下の句「我は野に出でて狩るぞわびしき」について考えたい。わびしいのは、「我」であり「野に出でて狩る」ことである。『伊勢物語』内には五十二段以外に「わびし」の用例はなく、九段に「ものわびし」が一例あるだけなので、動詞形の「わぶ」の用例や『大和物語』の業平歌の用例とともに意味を考えたい。

①「限りなく遠くも来にけるかな」とわびあへるに、渡し守、「はや舟に乗れ。日も暮れぬ」と言ふに、

乗りて渡らむとするに、皆人、ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。（九段）

②昔、男、五条わたりなりける女を、え得ずなりにけることとわびたりける……（二十六段）

③つれづれといとど心のわびしきにけふはとはずて暮らしてむとや（『大和物語』百六十五段業平歌）

①で男の一行は、墨田河を前にして果てしもなく遠くへ来たと悲しみあっている。さらに河を渡れば京から遠ざかり、愛する人々とますます離れることをなんとなくつらいと悲しんでいる。②で男は五条あたりの女を得られず嘆いている。③は死を目前にしてどうしようもなく物思いに沈む業平の悲しみが詠まれている。このように、「わぶ」「わびし」は自分の思うようにならない状態を悲しんだり嘆いたりする意味で用いられている。

それでは、五十二段において、どうして「我」は「野に出でて狩る」ことを、自分の思うようにならない状態と結び付けてわびしいと感じているのだろうか。先述した潘岳の「射雉賦」の末尾に、雉狩りに夢中になることは自分の憂うるべきことも忘れて正しい生き方に欠けるとあった。つまり、潘岳は本来なら君子として朝廷に仕えるべきなのに、それを憂うることもせず雉狩りに夢中になっている自分を非難しているのである。潘岳は『晋書』（巻五十五・列伝第二十五）に次のように記されている。

潘岳字安仁、滎陽中牟人也。……岳才名冠世、為衆所疾、遂棲遲十年、出為河陽令。負其才而鬱鬱不得志。……岳美姿儀、辞藻絶麗、尤善為哀誄之文。（潘岳、字は安仁、滎陽中牟の人なり。……岳才名世に冠たり、衆の疾む所と為り、遂に棲遲すること十年、出でて河陽令と為る。其の才を負んで鬱鬱として志を得ず。……岳姿儀美にして、辞藻絶麗たり、尤も善く哀誄の文を為る。）

潘岳は、西晋の文人で、河南省中牟県の出身である。幼時に奇童といわれ、武帝のとき「藉田の賦」をつくって才名があがったが、かえって人に嫉妬され野に隠栖することが十年にもわたった。その後河陽の県令となったが、出世は自分の望むようにはならず、その長い不遇の時期に「射雉賦」は詠まれたのだろう。『晋書』の末尾に潘岳は「岳美姿儀、辞藻絶麗」と記され、『伊勢物語』の主人公の男に擬せられる在原業平も、『日本三代実録』に「体貌閑麗、放縦不拘、略無才学、善作倭歌」と評されており、容貌が麗しく文章が華麗という点は共通している。

日本では、五月五日に宮中で端午の節会が行われ、菖

蒲の献上、騎射・走馬などの儀式が天皇出御のもとで行われた。そのような日に野に出て雉を狩ることは、本来自分が宮中にいるべき人間であると考えていれば、つらいことであろう。政治的活躍の場がなく隠棲して一日中雉狩りに没頭する潘岳と、五月五日に宮中ではなく野で贈り物にする雉を狩るのに苦労している男を重ねて読むことができる。九段で男は自分の「身をえうなきもの」としてとらえていたが、五十二段の上の句の「あやめ刈り」沼にまどう「君」と、下の句の野に出て雉を狩る「わびしき」「我」も、九段の男とその友人たちと同じようにとらえることができるのではないだろうか。すなわち、本来なら自分は朝廷でしかるべき地位につき職を与えられ活躍すべきなのにそうではなく、五月五日に野に出て贈り物にする雉を狩るのに難儀していることがつらいと言っているのである。

四　連想による段落の展開

本章では、五十一段から五十二段、五十二段から五十三段は、漢詩文によるゆるやかな連想により段落が展開していることを論じていきたい[11]。

五十一段は、次のような章段である。

昔、男、人の前栽に、菊植ゑけるに、

植ゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへ枯れめや

この歌は『古今集』と『大和物語』などにもみられるが、和歌に字句の異同はなく、『古今集』の詞書もほぼ同じ内容で業平作となっており、五十一段は「原初段階以来の章段[12]」と言える。『大和物語』百六十三段には「在中将に、后の宮より菊を召しければ、奉りけるついでに」とあり、菊と歌の贈り手が「在中将」であり、受け手が「后の宮」（二条の后）という伝承として五十一段がとりこまれている。

まず、歌の上の句の「秋なき時や咲かざらむ」について、新日本古典文学大系の『古今集』の五十一段歌の注には、「漢語『時菊』を言い広げた感がある。」とし『文選』「河陽県作二首」の「時菊耀秋華。（時菊は秋華を耀（かがや）かす）[13]」が例として示されている。この詩は前述した潘岳が河陽県の長官である令になった時の作で、管見では「時菊」の初出例で、菊は秋の時節にふさわしく花を開いて光輝くという意味である。「時菊」は、秋という時に咲く菊を意味し、菊がまだ珍しかった平安初期には、意味のある表現であったのだろう。五十一段歌は『古今集』の菊詠歌の中でも先頭に位置し、菊を詠んだ最初の和歌として評価されていた。それでも字音語で訓読みの

ない「菊」は和歌には詠まれず詞書で紹介されている。「秋なき時や咲かざらむ」という表現は、菊が秋に咲く花であることを強調し、秋という「時」と「菊」の結びつきに着眼している点で、漢語の「時菊」を背景にもった表現と言える。

この「時菊」の用例は、嵯峨朝時代の勅撰漢詩集『凌雲集』や『文華秀麗集』にもみられる。[14] 嵯峨朝時代は、政務や儀礼の唐風化が急速に進められて、文章経国が掲げられ、宮廷を中心に君臣唱和の文遊が盛んに催された。中国の河陽は県令の潘岳がその県中に桃の花を植えたことで文学上名高い土地であるが、日本では嵯峨朝時代から淀川西岸の山城国山崎の土地が河陽に見立てられ、山崎は八十二段の舞台である水無瀬に隣接しており、『伊勢物語』とも関わりがある。[15]

「菊」は、延寿の効をもつとされ、中国の重陽の宴という宮廷行事とともに移入された中国原産の植物である。奈良時代の『懐風藻』から漢詩に詠まれ始め、重陽の宴が盛んに行われた嵯峨朝時代の漢詩文には数多くの用例があるが、官人たちは類書で故事を知り、それを参考にして作詩する場合が多かった。[16] 当時読まれた代表的類書である『芸文類聚』の菊の項には、『楚辞』「離騒」の一節「朝飲木蘭之墜露兮、夕餐秋菊之落英。（朝に木蘭の墜露を飲み、夕に秋菊の落英を餐ふ。）」や、陶淵明・王弘の把菊の故事[17]などが記され、菊で連想される人物は屈原や陶淵明といった著名な人物に限られていたと考えられる。

次の五十二段では邪気を払う「あやめ」が取り上げられており、五十一段から五十二段への展開は、菊から「あやめ」へと薬効を持つ中国伝来の植物による連想や、九月九日の重陽の宴から五月五日の端午の節会という宮中での行事による連想がまず考えられるが、今まで述べてきたように、漢詩文からの連想も考えられる。五十一段歌の発想には、潘岳の詩の「時菊」が用いられ、菊と関係の深い屈原という人物の連想から、五十二段の「飾り粽」へと連なり、潘岳の「射雉賦」へとつながっているのではないだろうか。

次に、五十二段から五十三段への展開について考えてみたい。五十三段は、次のような章段である。

昔、男、逢ひがたき女に逢ひて、物語りなどするほどに、鶏の鳴きければ、

いかでかは鶏の鳴くらむ人知れず思ふ心はまだ夜深きに

暁を告げる鶏が鳴いて、どうしてまだ夜が深いのに鳴くのだろうと、自分の思いが深いことをかけている。先

述したように、古来より雉は野に鳴く鳥、鶏は家の庭で鳴く鳥ととらえられており、野で朝鳴く雉から、家の庭で朝を告げる鶏へという連想もできるが、二つの段には漢詩文による連想も存在している。『勢語臆断』は五十三段に『遊仙窟』が踏まえられていると指摘している。

始知難逢難見、可貴可重……可憎病鵲、夜半驚人、薄媚狂鶏、三更唱暁。（始めて知りぬ、逢ひ難く見難く、貴ぶべく重んずべきを。……憎むべき病鵲、夜半に人を驚かし、薄媚の狂鶏、三更に暁を唱はんとは。）

『遊仙窟』の長郎が出会った十娘は、仙界に住む女性で二度と逢えないという意味では、「逢ひがたき女」である。この『遊仙窟』の場面は、長郎と十娘が逢瀬をもった直後の場面で、病気の鵲が夜中に鳴いて人を驚かし、無情の狂った鶏が「三更」すなわち真夜中に夜明けを告げたとある。この点も夜が深いのに鶏が鳴いたとする五十三段と重なっている。

『遊仙窟』の女主人公十娘は、「容貌は舅に似たり、潘安仁の外甥なればなり。」と表現され、この詩句は『和漢朗詠集』にも引かれて人口に膾炙しており、十娘から潘岳を連想するのは容易であったと考えられる。また、『遊仙窟』には、潘岳の詩賦が数多く引用されており、その一つに「射雉賦」がある。「大夫巡麦隴、処子習桑間。（大夫麦隴を巡り、処子桑間に習ふ。）」は、長郎が庭の雉を一矢で射当てたのを見て十娘が長郎に贈った詩の一節で、潘岳の「射雉賦」の表現を用いており、大夫が麦畑を駆けめぐって雉を射ようとし、乙女は雉のように桑の木の間に待つという意味で、「大夫」に長郎が、「処子」に十娘がよそえられている。このように、『遊仙窟』は、女主人公十娘の容貌を潘岳似とし、その文章には潘岳の詩賦を数多く引用しており、潘岳と関わりの深い作品である。五十二段で潘岳の「射雉賦」が引用された後、次に潘岳と関わりの深い『遊仙窟』が引用されるのもゆるやかな漢詩文によるつながりと言えないだろうか。

上代からすでに『詩経』『礼記』などの経書類、『文選』などの詞華集、『遊仙窟』に代表される俗語小説類、初唐に編纂された『芸文類聚』などの類書、仏典類が享受されていた[18]。今回、五十一段から五十二段、五十二段から五十三段の展開で背景にあるとした漢籍は、すべて上代から長く享受されてきた中国の六朝や初唐の文学に限られているのが特徴的である。官人や学生であれば、暗誦し誰でも知っている漢詩文であったと言える。平安時代初期、嵯峨朝時代は、中国的なるものへのあこがれを

漢詩文で表現することを試み達成したが、五十二段前後の『伊勢物語』の表現のあり方は、嵯峨朝時代が文章経国を掲げ漢詩文で達成した表現を、国風文化の高まる機運の中で和歌的な表現として捉え直し、和歌で人々の心を惹きつけようとしたのだと考えられる。[19]

五　おわりに

五十二段歌は、上の句と下の句で緊密な対句仕立てになっている。上の句には『楚辞』の「漁夫」や「招魂」などの作品から、左遷され水辺を放浪する屈原のイメージとして「まどふ」が用いられ、下の句には「射雉賦」から雉を射るために、一日中歩き回って狩りをし、本来自分があるべき姿から離れていることを嘆く潘岳のイメージを重ねて「わびし」が用いられている。だが、五十二段の男や「人」は、屈原や潘岳ら中国文人たちにみられるような自分を有用と信じて強い不遇感を抱いているわけではない。九段にみられるような自分を京では無用とする不遇感である。九段で男は友人らとともに、理想郷を求めて道に「まどひ」ながら東国に行き、京から遠く離れて「わびし」い思いを抱いていた。屈原や潘岳は孤独であったが、男には、思いを共有する友人らがいる。その友の一人とのやりとりがこの五十二段と読むことができる。相手が男性で男と同じ知識人であれば、歌の意味する内容を理解することができたであろう。五十二段は短い章段であるが故に、多様な読みを可能とするが、友人を屈原とみなし、自分を潘岳に重ねて中国の著名な人物になりきることで、和歌を用いて中国的な虚構の世界を創り出そうとしたのではないだろうか。屏風の中の人物になりきって詠む屏風歌的な詠法がみられる。初段は「昔人は、かくいちはやきみやびをなむしける。」と結ばれている。この「みやび」については様々な説があるが、「みやび」の原義としては「「宮」「都」の語と同根と見られるところから、宮廷風に洗練された美しさ」[20]ととらえたい。それは平安初期の嵯峨朝時代であれば、中国的であるということになる。初段では、二人の女性と男が出会うその設定に『遊仙窟』が用いられていた。狩章段として初段から続く五十二段も、漢詩文の訓読的な引用はないが、歌とその歌の前後に位置する「飾り粽」と「雉」の二つの贈り物によって、屈原と潘岳を連想することで中国的な世界が表現されており、それが『伊勢物語』のめざした一つの「みやび」と言えるのではないだろうか。

注

（1）渡辺秀夫「伊勢物語における漢詩文受容」（『平安朝文学と漢文世界』勉誠社、一九九一年）、上野理・宮谷聡美「伊勢物語と漢文学」（和漢比較文学会編『源氏物語と漢文学』汲古書院、一九九三年）、山本登朗『伊勢物語の生成と展開』（笠間書院、二〇一七年）など。

（2）山本登朗「中国の色好み――韓寿説話と伊勢物語第五段――」（注（1）の前掲書）

（3）注（1）の渡辺秀夫氏の論文。

（4）竹岡正夫『伊勢物語全評釈』（右文書院、一九八七年）、鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）、片桐洋一『伊勢物語全読解』（和泉書院、二〇一三年）を参考にした。

（5）「粽」が歌や詞書で用いられた例は、平安時代までで十三例あるが、『元真集』では、藤原元真から「三宮」（村上天皇の第三皇女保子内親王と考えられる）に贈られており、男性から贈られる場合もある。

（6）『蜻蛉日記』下巻天禄三年の記事では、あやめを取り寄せて養女といくつかの薬玉を作り、時姫の娘には自分から送り、息子道綱もその恋人に母が作った薬玉を贈っている。このように、薬玉の作り手は主に女性であろうが、贈り手は男性も考えられる。

（7）小島憲之「『新撰万葉集』の詩と歌」（『古今集以前』塙書房、一九七六年）

（8）『勢語通：片桐洋一蔵本：大阪大学附属図書館蔵懐徳堂本 伊勢物語明暦抄』（伊勢物語古注釈コレクション第六巻・和泉書院、二〇一一年）の片桐洋一蔵本による。『勢語通』（宝暦元・一七五一年刊）は五井蘭州による『伊勢物語』の注釈書。

（9）渡辺秀夫「伊勢物語と漢詩文」（『一冊の講座伊勢物語』有精堂出版、一九八三年）

（10）上野理「伊勢物語『あづまくだり』考」（『文芸と批評』二―九、一九六八年七月）

（11）吉田達「「五〇段」～「五九段」における編成意図について――段連接に見える言語遊戯性とそれを超えるもの――」（『伊勢物語・大和物語その心とかたち』九州大学出版会、一九八八年）では、五一段から五七段には、「かなり意図的と思える程に連鎖的な言語遊戯性のおもしろさが見えている」とある。

（12）鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）

（13）この句は、『礼記』の「月令篇」にある「季秋（晩秋）には菊に黄華あり。」を引く。

（14）「時菊盞中浮。」（『凌雲集』）と「時菊不知高宴罷。」（『文華秀麗集』）の二例がある。

（15）『伊勢物語全読解』（注（4）に前出）には「八十二段を中心とする惟喬親王の水無瀬・交野の御遊と、『凌雲新集』『文華秀麗集』『経国集』などによってうかがわれる嵯峨・淳和朝の遊猟との近似に注目される。」とある。

（16）小島憲之『上代日本文學と中国文學　下』（塙書房、一九六五年）第七篇「奈良朝文學より平安初期文學へ」の第二章「平安初期に於ける詩」に、詩の用例とともに説明がある。

（17）『伊勢物語』十八段の男の歌「くれなゐのにほふが上の白菊は折りける人の袖かとも見ゆ」に詠まれた「白菊」と「白い衣」には、陶淵明・王弘の故事が背景にある。

（18）小島憲之『國風暗黒時代の文学　上』（塙書房、一九六八年）第二章「上代人の學問より表現へ」の「二　漢籍の享受」。

（19）『伊勢物語』八十二段は、注（15）で述べたように嵯峨・淳和朝の遊猟と近似しているが、八十二段では「やまと歌にかかれりけり」「かみ、なか、しも、みな歌をよみけり」と漢詩文ではなく和歌が詠み交わされている。

（20）鈴木日出男『伊勢物語評解』（筑摩書房、二〇一三年）の「伊勢物語要語ノート」による。森野宗明「伊勢物語の基調　みやび」（『解釈と鑑賞』四二―一、一九七七年一月）、秋山虔「伊勢物語―「みやび」の論」（『王朝の文学空間』東京大学出版会、一九八四年）、片桐洋一「伊勢物語の「みやび」とその背景」（『伊勢物語の新研究』明治書院、一九八七年）など「みやび」については様々な見解がある。

＊本文は、『伊勢物語』『大和物語』『古事記』『万葉集』『蜻蛉日記』については新編日本古典文学全集、『古今集』『拾遺集』は新日本古典文学大系、その他の和歌については新編国歌大観、『勢語臆断』は『伊勢物語全評釈』所収の本文、漢詩文は、『詩経』『楚辞』『礼記』『文選』は新釈漢文大系、『遊仙窟』は『遊仙窟全講』（明治書院、一九七五年）、『晋書』は『六朝詩人傳』（大修館書店、二〇〇〇年）、『芸文類聚』は上海古籍出版社、『日本三代実録』は新訂増補国史大系、『懐風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』は日本古典全集を用いた。表記については適宜私的に改めたところがある。

付記　本稿は、古代文学研究会例会（平成三十年七月、於中京大学）において、口頭発表したものを加筆・修正したものです。ご教示、ご指導してくださった方々に深く感謝申し上げます。

（ないとう・えいこ／愛知淑徳大学講師）